

ピエトロ・アレティーノのエクフラシス分析

ティツィアーノとの関係を中心として

加藤志織（京都大学大学院）

本発表の目的は、一六世紀イタリアの作家ピエトロ・アレティーノが、ティツィアーノの絵画について記述した、そのエクフラシスを分析し、従来指摘されてきた彼の絵画論に再検討を加えることである。

アレティーノが、ティツィアーノと友好関係にあり、彼の作品を称賛し売り込んだことは広く知られている。今日ティツィアーノに関する研究論文は膨大な数にのぼるが、アレティーノが彼の絵画をどのように見、そして記述したかについて詳細な分析をするものは稀である。その主な理由をふたつ挙げるならば、ひとつは、彼のエクフラシスの多くが、アルベルティやヴァザーリのような芸術理論書としてではなく、撞着語法を用いた断片的な表現で、書簡という形式に鑿められているからだ。そのためにエクフラシスの内容は深く考察されることなく、字義通り解釈され見過ごされてきたのである。もうひとつの理由は、アレティーノに与えられたイメージが、恐喝とお世辞によって生活の糧を稼ぐ外交家にして毒舌家、というものだったからだ。ブルクハルトがアレティーノに与えたこうした人物像が強調され過ぎたために、彼の作品記述はこれまで理論的考察の対象から外されてしまったと思われる。

他方で、アレティーノのエクフラシスに着目した先行研究は、エクフラシス中に散見される「実物そっくり」(vero)あるいは「生きているかのようだ」(vivo)といった記述から、彼の絵画論の特質が自然模倣の推奨である点を強調する。こうした絵画論は、アレティーノの理論的後継者と目されるロドヴィーコ・ドルチェの著作『絵画問答』においても確認できる。そのために、こうした自然模倣を積極的に肯定する点が、アレティーノ絵画論の特性と考えられ定着し、疑いが持たれることはなかった。しかし彼が残したエクフラシスの多くが、ティツィアーノ作品について述べたものであることを考慮しつつ、それらを丹念に読み返してみるならば、アレティーノの意図が自然模倣の推奨にではなく、ティツィアーノ絵画の持つ過剰なまでに激しい色彩と筆触による表現への賛美であったことがわかる。

アレティーノのエクフラシスとティツィアーノ作品との照応関係を見てみると、アレティーノが技巧をこらしているのは、皮膚、毛髪、布地といった部分の記述である。一方ティツィアーノは、当時一般的であった細密描写はとらず、筆触が視覚に与える効果を大胆に使って描いていることがわかる。彼のそうした描き方は一見すると雑な印象を受けるが、事実は反対でその表現に際しては細心の注意が払われていた。その技法の理論的支えとなったのが、当時宮廷人たちの間で共有されていた「さりげなさ」(sprezzatura)という美意識である。宮廷人は細心の注意を払って振る舞わなければならないが、それを他人に気取られることがあってはならない。あくまでも行動はさりげなく見えなければならないのだ。アレティーノは「さりげなさ」という美意識から、ティツィアーノ絵画の色彩と筆触による表現を評価し、それを撞着語法によって記述したのである。